

雨霽 竹内栖鳳 一幅

絹本着色

大正十三年（一九二四）

本紙一三八・五×四二・三



題名の「雨霽」とは、雨上がりを意味する。まだ湿り気の残る古木の柳には一羽の白鷺がとまって羽をつくろい、画面上部の枝には二羽の雀が喧しくさえずっている。栖鳳は同題の屏風作品（東京国立近代美術館蔵）を明治四十年（一九〇七）の第一回文展に出品している。竹内栖鳳（一八六四〜一九四二）は対象を見たままに写し取る高い写生技術を会得していたが、そこからさらに最小限の筆で対象の本質をとらえる省筆の方向へ進んでいった。本図の雀を例に見ても、わずかな筆でその姿を表すのは勿

論のこと、雨上がりを喜ぶかのような元気の良さえずりまでも見る者に感じさせる程である。

本図は箱書きから大正十三年（一九二四）の制作であることが分かるが、この時栖鳳は六十一歳で「東の大観、西の栖鳳」と呼ばれる程に、名実ともに京都画壇の中心となっていた。多くの門弟を抱え、また皇室の御用も数多く手がけていた。本図は、昭和三十一年（一九五七）頃に香淳皇后の母君、久邇侘子様の御遺物として久邇家より昭和天皇へ伝えられた品である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections